

いえないが、学校生活に魅力を感じなくなれば、怠学傾向を加味して、反社会的行動を表出しやすいので注意したい。

- ③ C 類型は中学生で 2 番目 (30.6%)、高校生で 3 番目 (12.9%) に出現しており、このことは中学生と高校生の大きな差異である。

(3) 性格特性

Y-G 性格検査では、6つの因子と 12 の性格特性をみることができるようになっている。

- 抑うつ性 (D)
- 情緒不安定因子 帰帰性 (C)
- 劣等感 (I)
- 神経質 (N)
- 客観性欠除 (O)
- 社会的不適応因子 協調性欠除 (Co)
- 活動性因子 攻撃性 (Ag)
- 衝動性因子 活動性 (G)
- 内省性因子 のんかさ (R)
- 思考性 (T)
- 主 導 性 因 子 支配性 (A)
- 社会性 (S)

この 12 の性格特性を中学生・高校生別にみると次のようになる。

① 中学生

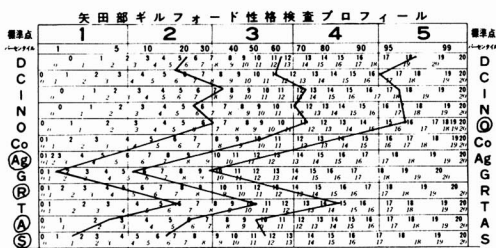


図 1 中学生のプロフィール

中学生の登校拒否児 36 名について、平均プロフィールをえがき、これにプラス、マイナス 1 標準偏差の範囲を付してみたのが、図 1 である。

平均からプラス、マイナス 1 標準偏差の範囲が、3~4、5 および 3~1、2 におさまるものを摘出してみると、前者に属するものとして、I、O の劣等感大、主観的な 2 特性が、後者に属するもの

のとして、Ag, R, A, S の非攻撃的、のんきでない、服従的、社会的内向の 4 特性があがってくる。

このことから、自信欠乏、不適応が強く、自己中心的で、適当な自己表現にも乏しく、決断力に欠け、しゅん巡しやすく、消極的・追従的であり、引込み思案で、対人接触を好まないという性格特性をうかがうことができる。

② 高校生

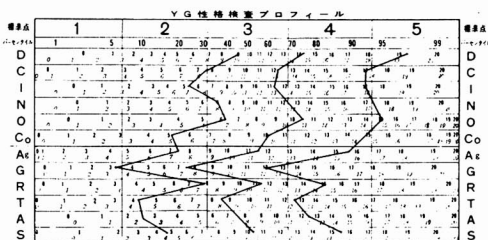


図 2 高校生のプロフィール

高校生の登校拒否児 31 名について、平均プロフィールをえがき、これにプラス、マイナス 1 標準偏差の範囲を付してみたのが、図 2 である。

平均からプラス、マイナス 1 標準偏差の範囲が、3~4、5 および 3~1、2 におさまるものを摘出してみると、前者に属するものとして、D、C、N、O の抑うつ性大、気分の変化大、神経質、主観的の 4 特性があがってくるが、後者に属する特性はあがってこない。

このことから、無気力・偏執的で、気分の変化が激しく、心配性であり、自己中心的な性格特性をうかがうことができる。

3 まとめ

登校拒否児の性格特性について、Y-G 性格検査をとおしては握してみた。

E 類型 (情緒不安定社会的的応消極型) が多数出現していることから、神経症的傾向の見られる生徒に対しては、情緒的な緊張、不安の状態より解放してやることが重要な鍵になろう。また、登校拒否児は、心の許せるような友だちがいない、運動を好まない、消極的であるなどが共通の欠点としてあげることができる。従って、指導援助にあたっては、これらの諸要因を十分にふまえて、個人に適応したカウンセリングが強く要請されるのである。